
人喰い

メタかつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人喰い

【Nコード】

N3757D

【作者名】

メタかつ

【あらすじ】

サンタクロースが好きな方、残虐シーンが嫌いな方、性的描写が苦手な方…絶対読まないでください！気分を害する恐れがあります。なおこの作品は完全なるフィクションです。気分が悪くなっても作者は責任持てませんので…

プロローグ

世の中には未解決猟奇殺人事件が多数ある。まあ有名な所では19世紀ロンドンで起きた『ジャック・ザ・リッパー』だろう。切り裂きジャックといった方がわかりやすいか？猟奇殺人は犯行の壮絶さから人の記憶に残りやすい…

だが20世紀、フィンランドで起きた猟奇殺人事件を覚えている人はいないのではないか？あれだけの事件だぜ？どう考えてもおかしい…

実は事件の背景には政府の陰謀があるようなんだ…

疑問を持った俺は独自の調査で犯人までたどり着いた。そして俺は今犯人の目の前にいる。犯人は俺に自慢するかのように当時の犯行を話してくれたよ……

ちなみに犯人の名前は…

『キリア・サンタ・クロース』

話は1970年までさかのぼる…

第1章 人喰い

異様な光景である…

男の部屋はコンクリート剥き出しで窓もベッドもテーブルも何一つなく、ホコリ一つ舞ってはいいない。殺風景で圧迫感がある部屋の中になぜか獣臭が漂う。

男は淡々と服を脱ぎ進め、すでに陰茎ははちきれんばかりに硬直している。男は服を脱ぎ終えると顔を上げた。そこには全裸にされた少年が涙を流し恐怖で震えている、両手はロープで結ばれ上に伸びている。いわゆる中吊り状態というやつだ……

「サンタのおじさん、嘘でしょ？お願いやめて」

少年はこれから起こる行為が予想されるのか哀願の表情で男を見る… 男の名前はキリア・サンタ・クロース。正真正銘子供達に夢を運ぶサンタクロースだ…

サンタは満面の笑みで口を開いた。

「坊や私はね前から君の事が好きだったんだ……人は好きな相手とセックスしたいと思う…でもね私は好きな相手の内蔵が見たいんだ………見せてくれるね？」

サンタはナイフを片手に少年に近づく、少年は恐怖で動けない。ナイフを陰茎に触れた。

「うっ痛！」

軽く皮をめくった程度である。すぐにナイフを戻す。

「痛いよ！やめてよ！家に帰らしてよ！」

少年が涙を流し哀願する。サンタは急にに優しい顔になった。

「痛かったかい？坊やごめんね…すぐに気持ち良くさせて上げる」

するとサントは自分の陰茎を少年の陰茎にこすりつけ腰を振った。少年は涙を流し悲鳴を上げるがサントは気にしない。5分程たち。絶頂を迎えた……

少年の腹には精液がこびり付いている。

「...う、う、う」

「ハアハア……」

「ハアハアハア」

「ハア！」

少年の顔が激しく曲がった、サンタは拳を振り上げる。何度も何度も拳を振るう。

「気持ちいいかい？ 感じるかい？ 君のカラダハさいコウダよ！ ワタしをモットキモチヨクシトオクレ？ ワタシヲモットコイフンサセテオクレ！！！！！！！！！！」

「ヒギヤアアアアアアアアアア！！！！！」

少年の悲鳴が聞こえなくなった時、サントは拳を下ろした……
サントは鮮血にまみれ、肉片で顔を汚した。少年の顔はすでに原型を留めてはいない。歯は欠け、眼球は下に垂れ下がっている、皮は

破け中の肉が顔を見せる。サンタは少年が動かない事を確認すると不満そうにナイフを手にした…

「イキタママ、ナイゾウヲミタカタノニ…」

少年の腹にナイフを突き刺す、下に削いていく。腸が飛び出してくる、サンタの下には内蔵がぶちまけられた…

そしてサンタは手淫を始め内蔵に精液を撒き散らした…

少年の遺体は特性の窯で煮込み10日かけて食べた……

普通、快樂殺人は徐々にエスカレートしていくものではあるが、サンタにとってこれが初の殺人であった。

彼は小さい時から俊才として知られていた。学問、芸術、運動すべて非凡な才能を持ち合わせていた。

殺人衝動は物心ついたときからあったが、だれも気づかなかった。いや気づかないように演技をしていた。

彼はどうしたら人を殺してもバレないか考えた時に、彼は人から信頼され殺人なんて無縁な人間と思われていればバレない……と考えた。

国立大学を主席で卒業し、医学博士までとった。そしてサンタクロースを襲名したのだ。

すべては快樂殺人を繰り返すために……

続く…

第2章　く擬態く

少年が惨殺され事件が発覚したのは少年が死んでから20日後の事だった。

その日少年宅には一つの郵便物が届く。父親が中を開けると手紙と何やら小箱が入っていた。

手紙の全容をここに記する…

――――親愛なる諸君へ

私はあなたにとっても感謝しております。なぜなら私に息子様をプレゼントしてくれたのだから…

息子様も大変喜ばれた様子で、私との行為を楽しんでおられました…行為後、息子様を解体したのですが宜しかったでしょうか？

今でも思い出します、息子様のおしりのおいしいこと、おいしいこと…

私は幸せ者でございます

愛を込めて

『サンタ』より…

――――

父親が怪訝な顔で手紙を見た。小箱を開けたときだ…父親の表情が変わる…

「ギャアアアア！！！」

父親がその場で座り込み小箱を落とす…箱に入っていた物は…

男性の陰部だった。

「サンタのおじちゃん、お散歩ですかぁ」

サンタの目の前には真っ赤なワンピースを着た可愛い少女が犬を連れていて、軽く談笑して少女は歩き出す。

「あれまサンタさん！今年もプレゼントがなばってくださいねえ」

今度は品のいい中年過ぎのおばさんだ。軽く談笑しておばさんは歩き出す

「サンタさんプレゼントよろしくね」

「お仕事頑張ってください」

「あれま？サンタさん、これ家で取れたジャガイモ……」

サンタを見ると皆、尊敬の念を込めて一礼する。サンタも満面の笑顔で答える。いつもの光景である。だれもサンタの裏の顔を知らない。考えることも無いだろう。全てがサンタの計算通りである。すると前から警官が走ってきた…別に驚くことでもない計算通りの展開である…

「サンタさん、ちょっとお時間いいですか？」

「あっ！デイビッドさん、何でしょうか？」

警官デイビッドは言いにくそうに話した。

「あの…ケビン君失踪事件は知ってますよね……それですね……朝こんな手紙が届いたのですよ」

サンタが手紙を受け取る…手紙を見てサンタは震え、目に涙を浮かべている…

「あの…手紙の最後に『サンタより』と書いてありますが、この手紙見覚えありませんよね？」

サンタは涙をこらえ震えている…すると後ろから大柄な男が近づいてきた顔は怒りに満ちている。

「おい警官！言っていーことと悪いことがあんじゃないのか？サンタさんが犯人だと思ってるのか

「ち、違いますよ！私も仕事なんですよ！だいたい犯人が自分の名前書くわけ無いわけです…」

デイビッドは一礼するとその場を逃げるように帰った。大柄な男は舌打ちしサンタの肩を叩いた。

「サンタさん今年もプレゼントよろしくな！」

「はい！期待しててくださいね！」

サンタは満面の笑みで答えた…全ては計算通りである…サンタは知っていた、統計的に犯人が手紙に自らの名前を書くことがないと。勿論直筆ではなくパソコンで打ち込んだ…そしてこの村では自分が疑われる事はないと……

『ダレモ、ワタシノカイラクヲジャマスルヤツハイナイ…』

サンタは夜、地下室のパソコンを覗き込む。そこには村の少年少女

のデータがインプットされている…

サンタの散歩はデータ収集でもあるのだ。彼は少年少女の帰宅時間、性格、行動全てをインプットしていた。そしてパソコンはある少女の顔で止まる…

「エレナ・ワグナー13才…この子にしましょうかあ…」

サンタの股間は既に破ち切れんばかりに盛り上がっている。おもむろにズボンを下ろし手淫を始めた。

「エレナ気持ちいいよ…もうイキそうだ…さあ君の陰部を裂くよ…いいよ！いいよ！イクヨ」

サンタは独り言をブツブツ言い、手淫に励む。

サンタの太ももには自らの精液がこべりついたのだった…

続く…

第3章 〽2人目の犠牲者〽（前書き）

キリア・サンタ・クロースのモデルはアルバート・フィッシュです。

第3章 ２人目の犠牲者

この日、キリア・サンタ・クロースは朝から地下室に籠もりパソコンを眺めている。犯行の手順を頭の中に叩き込む。

人間と言うのはいつもと変わった行動を嫌う。できる限り自分で作ったルールを守ろうとする、一週間もその人を見てれば生活パターンは分かってしまう。

サンタはエレナの行動は手に取るようにわかる。恐らく今は学校で勉強しているだろう。真面目な彼女は私語も言わず、教科書を見ているはずだ…

16時40分頃、エレナは彼氏のマイクと共に学校を出るだろう。エレナは処女なのか？今日確かめてみようと思う。

17時頃、マイクの家に着くはずだ手を振りながら『バイバイ！』と言うはずだ。エレナはそこから自宅まで1人だ…まだ襲うのは早い…

10分程歩いたら私の家が見える…この時間帯、私の家の周りにはエレナ1人になるはずだ…門でエレナは一度立ち止まるだろう…そしてこう言うはずだ…『サンタさんの家はおつきいなあ』
そこだ！そこでクロノクロムを吸わし、直ぐに地下室に運ぼう…

サンタは立ち上がり時計を見た…

「16時27分…そろそろ学校から出る頃ですねえ…」

サンタはこれから起こるであろう行為を想像し手淫をした…

その頃…

「みんなまた明日ね」 さっ、マイク帰る」

エレナとマイクは手を繋ぎ談笑しながら帰る。実に微笑ましい光景である。エレナは途中でマイクと別れる…サンタの予想通りである。既に辺りは薄暗くエレナ1人しかない。サンタの家の前を通る。エレナは立ち止まりこっぴつた

「サンタさんのお家、おつきいなあ」

ガッ！

エレナの意識がなくなる

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

エレナは状況が把握できない…だが妙に寒い…

全裸である。さらに腕にはロープが結ばれ宙吊りにされている。エレナは恐怖と言うより訳が分からず混乱している。

「目が覚めましたか…」

「キャ！」

エレナが顔をそむけた。そこには全裸の中年男性がいる。既に陰茎は破ち切んばかりに垂直に伸びている。

「おやおやマイク君に見せてもらってないのかな？」

男はエレナに近ずき陰茎を太ももに押し当てている、エレナは恐る恐る男の顔を見る。顔が硬直する、男はエレナの知ってる男だ…

「サンタさん？えっ？どういう事？お願いやめて…！キャアア！」

サンタはエレナの股を開け秘部をマジマジと見ている…サンタは嬉しそうに言った。

「処女だっ たんですねえ…嬉しい…今日はいっぱい気持ちよくさせてあげますよお」

「嫌あ…お願い…やめて…嫌よ…やだやだ…！
ギヤアアアアアアア！」

サンタは躊躇なく膣に陰茎を突っ込み腰を振った。処女膜は破れ陰茎は血に染まる、エレナは人の物とは思えない悲鳴をあげる。そして精液を放出した。エレナは涙を流し体が震える。

「う…う…う…酷い…やだ…ひどい！変態！」

「変態？…変態…」

サンタの表情が曇る…体は震え、齒軋りがカタカタと聞こえてきた…

「…へんたい…私が？」

拳を握る力が強くなる、エレナの顔が恐怖でひきつっていく…サンタから獣臭さへ漂ってくる…

すると急にサンタから震えが止まり、満面の笑顔でエレナを見た。

「エレナ君：私はね… 7才の時、両親のセックス現場を見てしまったのだよ… 私はね射精してしまった。私は頭の中で母親を犯したいと思った。」

そして母親を食したいと思ったのだよ……」

⌋
⋮
⌋

「母親を愛していたからね…母親を食べる事で身も心も一つになれる……私の言いたいことがわかるかい？」

エレナは首を横に振る。

「エレナ君、私は君を愛している！君を食したい！！！」

サンタはエレナの膣に齒をたてた、エレナは悲鳴をあげる。

「ギヤアアアアア！」

膣は裂け子宮は切り裂かれ腹部は真っ赤に染まる

「ヒギヤアア！ヒギョアオア！！！！！！！！！！」

歯が腹部に達しようとしたときだ……エレナがさらに悲鳴を強める……

「ギョ
シャアア
オイリヤアアアアア！……！！！！！！アウ！」

一気に内蔵が体から飛び出した…

「カッ……………」

エレナの悲鳴が消える。サンタは満面の笑みで床に落ちた内蔵の中に飛び込んだ……………

キリア・サンタ・クロースは恍惚の表情で内蔵をすくっていたのであった……………

サンタ2人目の犠牲者であった…

続く…

第4章　く快感く

エレナの死骸はノコギリで解体し内臓は塩付け、残りはソテーし食べた。そして、サンタは前回の犯行と同様に両親待てに手紙と死骸の一部を送りつけた。手紙は前回の手紙と内容は酷似しているためここに記する必要はないと思う。

話はそれるが、幼児猟奇殺人犯というのは幼児期に何らかのトラウマがある場合多い。最も多いのが性的虐待と言われというがキリア・サンタ・クロースの場合は少し違ってくる。

彼は母親を犯したのだ。暑い夏の日、彼は仲間数人とともに母親を森の中で犯した。抵抗する母をよそに彼は自らの陰茎を実の母に押し込んだ。

涙を流す母の顔に容赦なく鉄拳を送る…仲間達は母親を押さえ抵抗さえもさせなかった。

そして精液は膣内に放出された…

彼らは事が終わると、一目散に逃げたっていった。サンタは仮面を被っていたせいか母親にはバレてはいない…

母親はこの事を誰かに話すことはなかった…女としての意識と言うよりサンタクロースの妻が強姦されただけの世間にしれなくなかったのだ。

サンタクロースは子供達の憧れであり夢なのだ…母親は子供達の夢であるサンタクロースを汚したくなかったのだ…
キリア・サンタ・クロース11才の時の出来事であった。

中年の色白男の前には白髪交じりのスーツを纏った紳士的な老人がコーヒーをすすっている。カップはマイセンだろうか？天使が描かれている。

老人はカップを置き、前の男に視線を向ける。ゆっくりと口を開いた。

「日本のジャーナリスト君、私の童貞は母に捧げたんです…母も感じてくれて良かった。私は母との行為を思い出し何度もオナニーしました…」

そう、この老人こそが現在のサンタ、キリア・サンタ・クロース本人である…もう齡80は過ぎているだろう。スーツはブランドで統一し、室内なのになぜかシルクハットを被っている…男は信じられなかったこの紳士的なサンタが幼児連続猟奇殺人犯とは…男はサンタに目をやった、サンタは薄ら笑いを浮かべて話を続ける

「日本のジャーナリスト君、私が何故遺体を食すかわかるかね？」

男は顔をしかめ

「さあ」と言った。するとサンタは満面の笑みを浮かべる。

「先に話したように食すことで身も心もひとつにすると言うのもある…それともう一つ、遺体という最大の物証を食す事で物証その物を消し去るというのもある…」

話し終わると、サンタは高笑いを上げた。その光景が不気味で男は目をそらした…2人は目を合わせることなく重い空気だけが流れ

る。そしてサンタは急にまじめな顔になりこう呟いた。

「日本のジャーナリスト君、君は真実を知りたいと言ったね。」

「……………はい」

サンタはコーヒーを一口飲み、一呼吸おいた…サンタは男の顔を睨み怪訝な顔で言った。

「ついてきたまえ…」

一言いうと、男とサンタは立ち上がり階段を下りた。サンタは無言で屋敷の奥へ奥へと進み、屋敷の地下へ降り立つ…。そこには黒い鉄の扉がある。扉はの奥からは獣臭が漂ってそうだ。サンタは扉を掴み開ける…

男は息を飲んだ…

コンクリートむき出しの壁、部屋の真ん中には滑車、無造作に置かれたロープ、所々、黒ずんでいるのは血痕だろうか？あまりの圧迫感で吐き気まで催す…

「ここが、幼児と私の愛の巣です」

「……………」

「この地下室で私は殺戮を繰り返した…幼児の内蔵を掻き出した…そして私は余りの快楽に酔い自分を抑えられなくなった…」

「……………」

「一年もすぎた頃には村の三割の幼児は消えていった…」

その頃の私は計画的に幼児を食べる事さえも面倒になっていた…出来るなら好きな時に好きなだけ食べたい…そして私は自首したんだ…」

「……………」

「殺しのライセンスをもらうためにね…」

薄暗い地下室のためかサンタの顔はまるで悪魔のように見えたのだ…
った…

第5章 く殺しのライセンスく

1971年3月7日

キリア・サンタ・クロースが幼児を殺害して半年がたった…

この頃になるとサンタは散歩に行く回数も減り、地下室で独りで過ごすことが多くなった。

サンタはもう自分を抑えることが出来なくなっていた…最初の頃は1ヶ月に1人を殺害する程度だったが、日に日に人喰い願望が強くなり2週間に1人、1週間に1人と間隔が縮み今では毎日殺しをしても満足できない体になっている。

いつしかサンタはどうしたら沢山の人を食べれるか考えるようになった。出来れば合法的に何も考えず食したい…そしてサンタは思いついてしまったのだ…合法的に人を食べる方法を…

地下室の前には警官デイビッドとサンタが立っている。デイビッドはこの異常な光景を直視できずサンタの顔を見た。サンタは満足気に笑みを浮かべ股間をまさぐっている。すでに目の焦点は定まっていない…

「デイビッドさん、素晴らしいでしょう…私のコレクションは…」

「……………」

デイビッドは言葉も出なかった。異臭が鼻につく……………

地下室の滑車にはひとりの少女が繋がっているがすでに下半身は無

く内蔵も綺麗に取られてしまっている。さらに大きな釜の中には数人の頭部が煮込まれ皮は溶け頭蓋骨が見える…壁には人の上半身で出来たベストがハンガーに掛かっている、棚の上には人の陰部が綺麗に並べられている、ビンの中にはホルマリン漬けた内蔵の一部だろうか……

薄暗い地下室ではサンタが不気味に笑っている。

「デイビッドさん、私はね…もう抑えられないんですよ…今この場でも食べたくなってしょうがない…私はね…殺しのライセンスが欲しいんです…」

「…はあ?」

「殺しのライセンスです。合法的に人を食べたいんです…だからあなたを呼んだんです…」

「……………」

「言ってる意味が分かりませんが…」

デイビッドは困惑した。サンタの言っていることがわからない…もし殺しのライセンスがあるとしても自分と何の関係しているのか…

「サンタさん…言ってる事がわかりませんね…これだけの事をしたんだ

タダで済むと思ってるんですか?」

サンタの股間が濡れているのがわかる。射精したのだ。このデイビッドの発言を予想してたように奇声にも似た笑い声をあげる…

「くくく……知能が低い人間は困りますねえ……説明が必要なようだ……私はサンタクロースですよ……子供達に夢を運ぶサンタクロースです。フィンランドが世界に誇るサンタクロースです。まだわかりませんか？」

デイビッドは眉間にシワを寄せて首を横に振った

「理解力が低い人間ですねえ……」

デイビッドさんあなたはフィンランド政府にこの事実を伝えるのです……

サンタクロースが幼児を食べたとね……

世界が批判しますねえ」

「……………」

「私はね国家公認のサンタクロースですよ……当然国家にも責任が及ぶはずだ……観光客も激減するでしょう……国はこの事実をどう思うと思います？」

「……………」

「隠すようなあ……私は夢を与えるサンタクロースであり続ける……この事件は最初からなかった事にする歴史から抹消する……それが国にとって最良な選択のほうですよねえ……」

デイビッドは体を震わせサンタを睨んだ。サンタは気にも止めずデイビッドの肩を叩く。

「デイビッドさん……私はサンタクロースであり続ける……君は国にこの事実を伝えるのです……国が私に『殺しのライセンス』をくれるの

です…これで私は政府公認の人喰いができるのです…」

サンタは満面の笑みでデイビッドを見た。デイビッドは困惑し言葉がでない…

こんな事が許されるのか？サンタの言ってることが許せなかった…

だが国はサンタの予想通りの反応をしたのだった……………

エピソード

薄暗い地下室の中、スーツに身を飾った老人は錆び付いた滑車を眺めていた。老人はどこか満足気に薄ら笑いをしている。この老人は現在のサンタグロース、『キリア・サンタ・クロース』本人である。サンタは一息おき男に話しかけた。

「日本のジャーナリスト君、私の話はこれで終わりだ。私はフィンランド政府から守られているのさ。他に何か聞きたいことはあるかね？」

薄暗い地下室で悲しみの表情を浮かべる男。日本から来たジャーナリストと言う男。サンタはこの男の顔を覚えていない。男にとって幼児連続殺人事件などどうでもいい事だった。

ただひとつ、キリア・サンタ・クロースと言う老人を死ぬ前に一度でいいから見ておきたかったのだ、男はサンタに視線をおくりに話しかけた。

「サンタさん…私の顔に見覚えはありませんか？」

「は？……どういうことかね？」

「……………」

男は黙った。自分の正体をサンタに告げるべきか、重い沈黙が2人の間に流れる。数分すぎた後男は頭を下げ一言…

「ありがとうございました…」

男は一言つげると走るように屋敷を出た。サンタは後をおおうとしない。その場で立ち尽くし涙が止まらなかった。

キリア・サンタ・クローヌは男が誰なのか理解してしまったからだ。
薄暗い地下室の中、サンタは膝をつき震えている…

男の正体…

それは…

漆黒の地下室の中キリア・サンタ・クローヌはただただ震えるしかなかったのだ。滑車の音だけがキィキィと虚しくなっていた…

エピソード（後書き）

正直、未完の作品になってしまいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3757d/>

人喰い

2010年10月14日16時44分発行